

環海異聞

附三

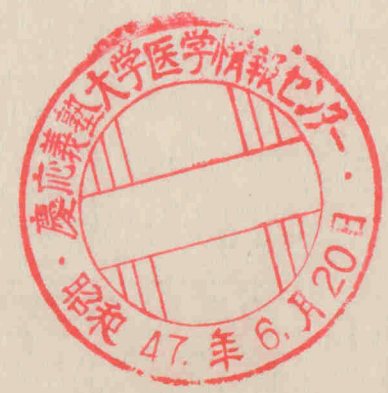
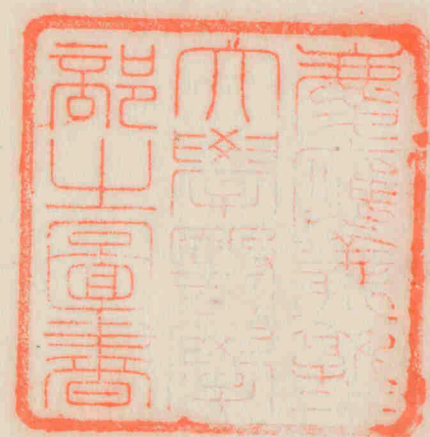
十三



k 44

290.9
K

No. 2523
12 K 44



富士川文庫
172

本三又



環海異聞卷之十三

帰朝洋中之記

翌子ノ年 文紀元年 甲子 四月下旬 マルケイサと云

島より船繋うす

マルケイサ共彼人の呼し松は是ゆ力ナ

スタよりけ石と千貫と十六合せしる程

るりといへり

海路記を按するよけふ（と云）船するも波
を月廿四日我に月十五日と云ゆ際客
に月下旬と云ふ一にお遠せり

けづのを又六七番も有りといふ船中より見え
れてけふ海路く波浪烈く荒き所之に船乃
くもけづへ初めの松子うて湊にも着き
く一湊をえきく船を泊む船中の人等
づりいけづ人より多く客船恰も鬼人の如し

男女ともは裸體を露せたり右の地
と向ふの溪道と云ふところ果して裸なる
男女二人えゆを顔に逢ふく男の丈七尺人
解頭面より髪より足の端まで彫れ入るを
る一陽をあらはし但し髪のはをあらは
伸しき糸のときものをいひ結ひ金く女は
五人程入るははきよけり有り前ハすその
草の葉をあらはしき連なるをいひ葉れ

吾儕ひく紐して腰に結ひ止む本船港へ入るをそ
男女たは海に飛出さるへを要する魚の涌く
也——何う物いふ——強ふ本船をえおの松子
追ふ急中の男女夥多漕きつひ来る生椰子
は臨境地なり 又ハ紐 紐ハ沖にある船より捕ることをい
夥多椰子あり 持来るもありその内は弱體をさげ来るものあり又ハ
小兒と脊負あり——泳ぎ来るものも又由漸くは二三
百人程より入り皆く五羽おとすむ舳舻りけしを

全族の聲せざる地なり蓋し——松子とオロニア人
皆——居たる松子より 脱る水櫃の鉄籠タカのまをれ
たるおとえ達——船中の賑治は新ち切せし
もの数多あり是を け程つか
ふへられハ紐を尾は交易して紐を手にさけて
おとを帰りやうなる所をわき——松子松子
なりよこれを食ふ——舟より人々を要む類
て男女昼夜夥多あり——は船に集り強ふ

事いそぐさず——船方の者うれを四より割せんと
——たるを使節さ——あるをあらうさうけし人
あつものやをばあうへもけりう——とそ穂後さうり
扱をせうり用あを増——かへんたあけあへ舟を
あせ——は右の侍うて中——懸置掛合うも及び
う——さ迷惑——たり一日彼等のあひてあふ船へ
漕ぎあ——者ありこれ急人とは又けりむあ人
たは裸體うて面と腹へうり入雲——頭は髪うて

唐人のう——まぶ布

まぶはな皮このときおを續皇禪
仙方云こ

う——たりけあ人本船のかペタンは出ずといやうるハ
承——さうへハアエゲリふき入はうこリースケは乃
者けり十餘年あけ急へ漂き——帰るき便りも
なく月日を送り——田嶋の女婿とけり今へては
承後するうとるけりといへ二人の者オロシヤ群も
通する趣うううもあまの言葉文字もあへる
るあれハあひは客子かりたりああ人ハカペタン等れ

頼ちるを本船に送りしに 薪水ホ増し入船を
 寄せしに 忌船ありしより 橋人船のた右前後へ
 登来ともに 渡り難くして 方よりやるも 取合は
 只さしに 渡のころて そろるさきり 隔りし何
 卒に川を 追退け 薪水と急より 求めしを
 とりしひくれしといひるは 彼女人のそと 女を
 船へあけ 試さし ありし等として 好嫁せしめ 研
 うおとあへし たあし 八人乗新しき して 何るも 自

申ねるへ——とあへたりけ云は陸ひ使はハ新ぬ
 顔——上役の者を水または内庭——教の如く
 矢扱せを便として鉄鉈のやれが——でせ
 くれハ大ひは怪ひ持帰りたりこれより男女公や
 ち——き——舟の者へは傳達より水等を運轉
 入るよりはぬ大ひる桶へ注へたる水け方の人
 ニ三人をて軍ひ入るおと急人ハを人より撥ち
 くれたりその力量をより新るべきなり

一 彼事教へて一人の者へさうさの巾着を謝礼
とて送り

一 レサノツトまゝと陸へ謝礼とてさうさへもあ
含のうへに又含るゝ紙を謝礼とて送り
着て用意せしとてさうさの彼うへに紙を送りたり
一 湯まゝあつてお茶の思慕へはけ湯人さき
たる人をも食す今ハ死人のこゝに食ひ親族と
いへとも擇むべくなり土地は椰子多しさうさ

これを食すといふ

一 湯の内は居家といふものの別はれく岩の狭間
なとに居るとさうさ

一 柄拂のうへに魚骨をいへて製しを毛糸さき
へハ炙刺^{トケ}を焼へたるおありこれを以て煮
身へ卵おをれとてさうさの換花あり頭面と
さうさの端へ近残るおれへ但歌の女角
と髪を残しはるおれへさうさをさくおれを

角のこゝへ水支の円筒は指人を添ひ換へ
 又字を書きつて彫せたるは槌のこゝより
 何りて右の氣と牙のこゝをあて槌をうちて
 牙血おれはし業うてあきなりくほり又
 ふき又何りておもれくおききうふし
 るるるゝそ文字ハヨロシヤ又うて何年何月
 う目け多あへありしといふをほせしと
 いふはえより
 文字なりとすゆ

鯨器圖





一 急の度サ 何程あやあやに追々いふお船一臺

あるきり そぞろ目の口時比きり後げゝ夜餅

程大なる 橋とそへうり 橋のうちよる心も

えゆ

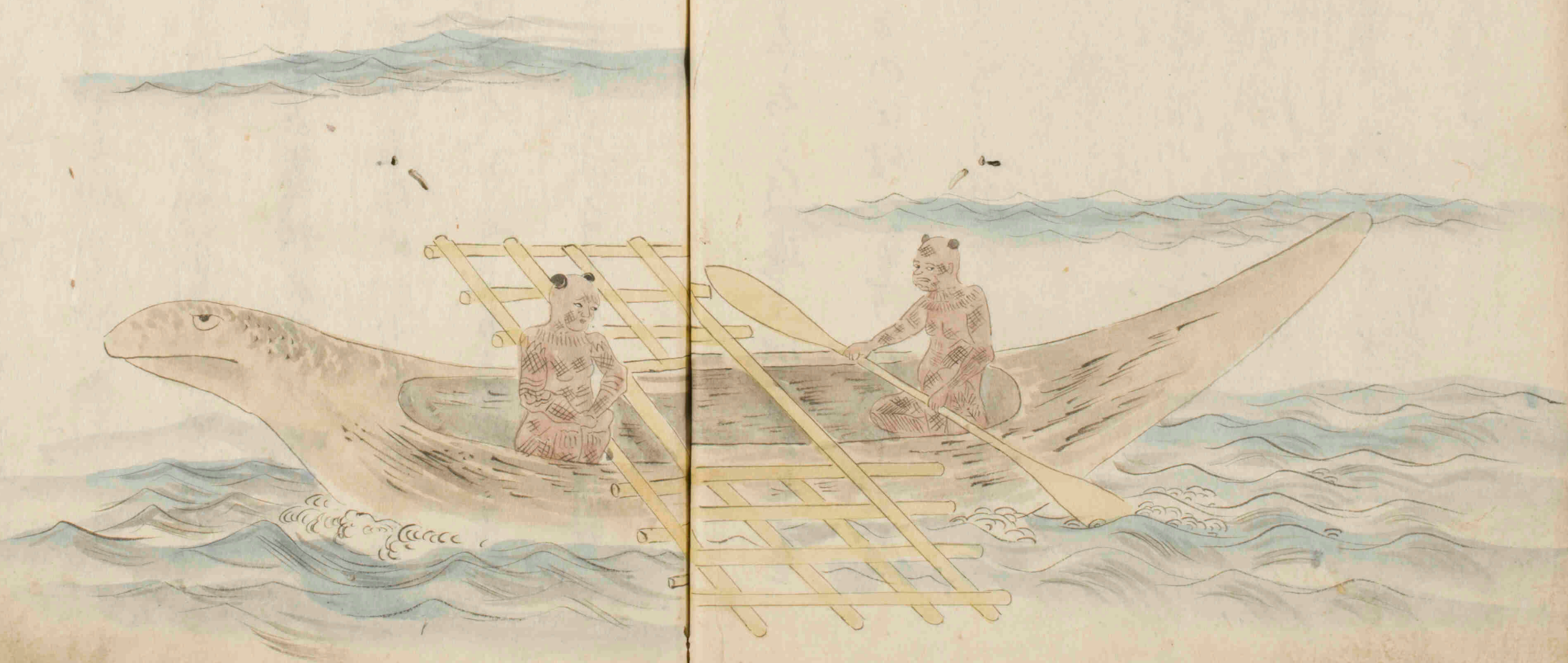
一 橋の船ハ大枝の中を踏みこる おへ大蛇の形哉

多かる 腰はん地既触ハ丸木を彫り 尾の形と

細きく 倒れ易き 柱さそれ夜よやぬ暇へ

はけよのあり たのふのと

マルケイサ島船図



一 此は世界の中心にありこれよりいふべし
と船の人々より皆驚人をセイカ〜といひ
たり 鬼人といふるなり

一 数日経船〜して北をぬき

按てマルケイサを南西墨利加湖のあたる
南洋の島々此地温熱の一小島なるを
時ハ政選巴海の人といふとも無船せしむ
るハ世界旧國よりなるなり 近來拂郎

察國新製世界島といはれをわ〜け及將來
のヲロシヤ版世界島ともおもひ〜しを
在拂郎察製の島と授されハ十度
の島といふ拂郎察島といふ〜正に
〜と間氏い〜又曰洋中船路の標的
とるす なるるをき〜し船をき〜し
えゆと

五月三日 以 マルケイサの船

海路記を按するにけしきと舟を繋るる日
十二日として彼六月六日我四月廿九日
帆をえゆ漂るる暗記する所の如船の目ハ三
日の多し有り
是より大槓を向くをねるにえゆ又世界の
去中へちとく船中初めのく酒宴をほ
祝事たり

マルタイサ発帆以後海路記

彼六月七日	我四月廿九日	彼六月八日	我五月一日
同四月九日	同五月二日	彼同月十日	我同月三日
同四月十日	同五月四日	同同月十一日	同同月五日
同四月十三日	同五月六日		

按は世界の去中といふに
間我曰カナリヤのベツロ
度ありして赤名を以て
るは彼同年六月十三日

我五月六日は何處なるルケイサと屋帆して七日
めと名ゆる之赤尾中とあり南へ又南へ
少くも四回を経るの渡海彼人といふも
稀有のりなるは亦亦の人は在りてハ
返すくも屋帆中自來有の事
なり

彼六月十日我五月廿日彼六月廿日
我五月廿日と
同し日並金
赤尾中とありて三十七日彼よりふたつ星を視てサシ

パイウケといふ大島の邊へ舟を寄すは橋は年未の旁
へ走り居りて橋のちさマルケイサより大ひるる
松より見ゆ
伊良の大島
程もあきき
松中ふと見ゆ但る山といえ
は以氣候ニルケイサ日松より見ゆ是をけ橋山の
根を舟をよせ夜ハ沖へあせり

何處あけ舟を寄すと船中の人々四ひれ
ハけ橋へハ何よの証ありて是ハラニリースケの人
あり居りて改めせぬときけりハラニリースケを

本國へを贈せぬものなる所の陰謀ある
うも難事な疑ひく思ひくし陸軍を

いり

島人マルケーサ人等と同様のものにり

あるところとて男の髪を剃切りまた

髪を剃るあす新髪二枚と振たり又

る日本人程あるべし女の髪を剃り髪を不

かしく剃切りその髪を剃る白く

られ自然なるう又白くものを傳へたり

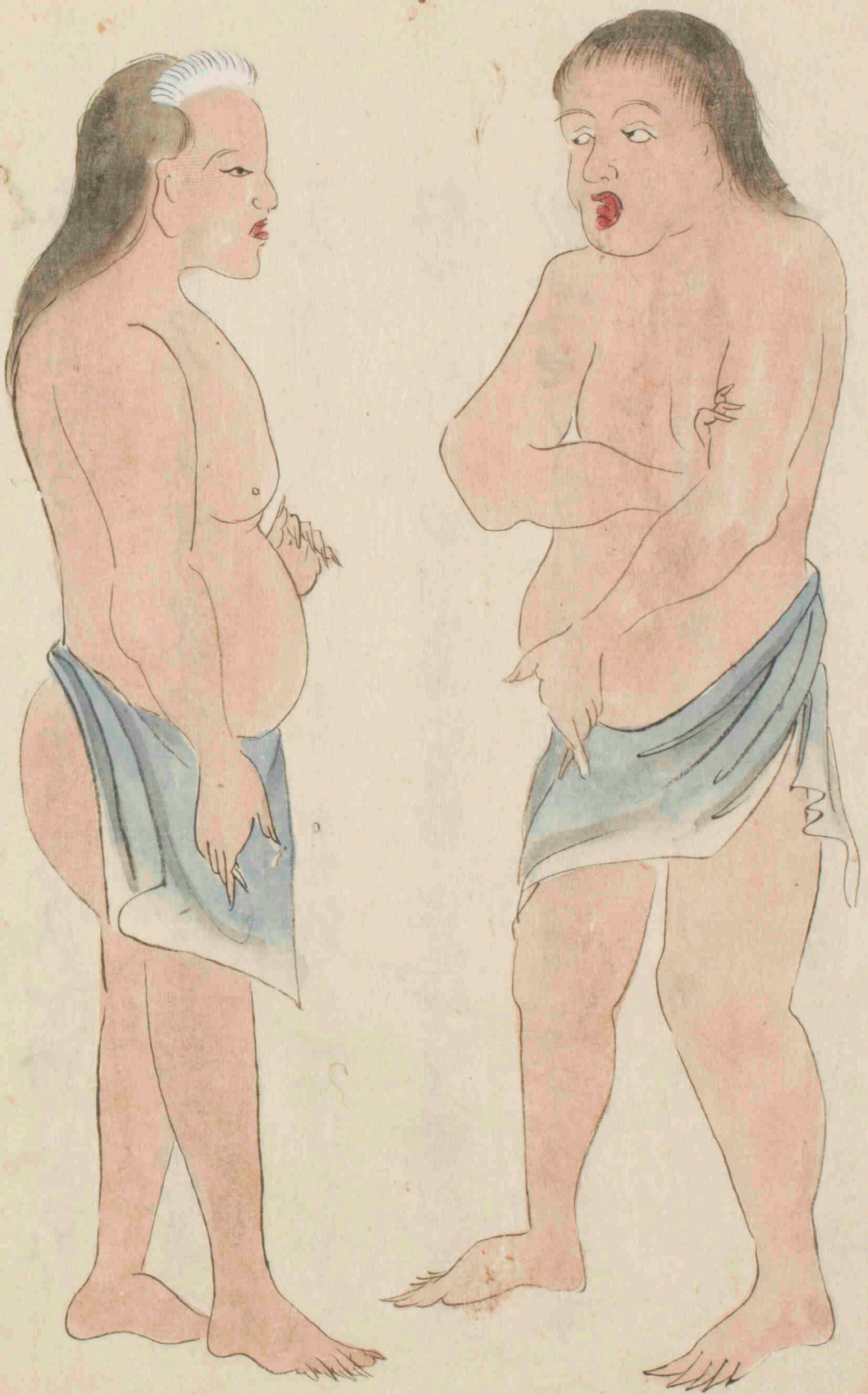
うよえとあすあのはの髪をあそ新髪を

あり

船中の人曰く島は日本地へを新髪も

いふを剃りて髪已の髪をかきあす不

くところ髪をかきしる髪り



急人の船より 承を要求せし船へ金——とて
 布交易のりれ——

地島海路記を按するにサレペイツケといふ名
 る——サレドウイク橋よりせし——とてあけ
 名の是遠きなり——そとあるは是れなる彼六
 月廿八日我五月廿三とて入たりマルケイサを
 お帆——て十五日わたりし隠れなるに七日を待て
 たり——とていふ ^{イブカ} 不害——其の門を急根へ

船を寄せ——ハ地球儀を教養を測りて
為るる——

間氏曰けりも此一面洋人海船の標的と
するに足るる如きは亞墨利かの南海
を以てマルケイサを的としてあるより又
サントウイックを以てして少くも此等
——我 邦或ハ唐山即ちの南海へ渡りて
見ゆるよりけりヤロシヤ人もこれ測りて

カシヤ——ツカへあるとあるに
人の測るハ二或二十度洋にあり拂
察人測量する所をハけりとの経度二百
七十七度洋にあり相較するが如きあり
拂察の測量と是とするは如何なり
これヲロシヤの我々海の測量と
をあると云ふなり

サシベイツケを以て船——は是よりカシヤ——ツカへ向ふ
海流を測するはサシベイツケ彼六月十八

我二月一日 云——くを我月と云——くを其月

廿九。我二月二日よりく彼七月十二日 我二月七

日教十箇目の百原号は日曆と關くそ等

知るくは遷る等いふ所サンペイツケも

教目滞船はせらる様子をけふけ間の日曆宛

するや言や解する處のく次

日教十四日を欠後の日記

彼七月十日永六月七く後日曆合く彼七月

其我六月廿五。彼七月二十日我六月廿六。彼

八月一日我六月廿六。彼八月二日永六月廿七。彼

八月三日永六月廿八。カミジャールカミ岩と見ゆ

日教其の程をり其の月收曉より日の光り照る様

り満天の光星をえたる不二日程あり 但年中程は

唯朗よりいあらきり 船中もふ妻と思ひてをを

をある様子の者も有りしは 何れ子細有るといへ

てカベタン板の第より居たり 目には近き海といふ

りてハ水のまへ船をまゝす日本地をたぬれて
通ると皆いひより

け海と陸山の類絶くえうけまてカミヤーツカへて
船一目あより山をえうけたり

七月三日 カミヤーツカロ忌

海路記を按するは彼八月三日永正月廿八カ
ミヤーツカ忌とえゆ

和歌書よりハ彼曆表一ふ八百四十年九月三日

南子七月 カミヤーツカヨゐるとあり 茂賢 按彼
廿九日

九月ハ八月の和歌の強り我七月ハ六月の
強りれる也

け所魯西亜航分東水のそ境をぬより教千星
のちより我機夷民ハ接近の事より船路を
始め使節そ外系組の者け所ハ始てあるるを

カミシヤ—ワカもあせうといふれども湊口是れす彼
是れと舟を止—たりを要—き能き面ありと
いろ—え合せらるる初れよと湊口よりいへる
舟をやりと—又乗船—よく初れたり湊は袋
とろす所なり湊の揚場より船程はまゝの中程
より急—として白くえゆる小急所あり 急ハミタローカ
といひ—や
是ゆに樹十中程有人ハよりか—といふ
是等の藁—を—白くせりてあるやす
海より— 湊口の月南とほるなり就る

海より湊をより所の入口—狭く左右あり
る山お峙^{リハツチ}ちたる所より初めと際とも初まれ
又湊の入口とはえへるを右月南の—白急もそ
るある—よりせんきの海程まで—急—初め
す—又そこを降りうけは船程引さるれ海より
湊内の白急えたり各慌ひ—を降り舟を
進めあせられハ初めえりたるあふ時—るの如
く—不なりき 歸—より舟を入れられハ

湾をうへむく廣を濤より濤の只へ入る
船をこけくは其小急の波を逐船一横り
まれく濤へ入すそ富海多き場なること
を辞る船よ舟を止めて急なせり入口の
八十里ありといふけちをバウヲロケカリ
といふハウラツケをこけを押願せし中
奥の帝王の名をうて名付しとガワハ
あくる濤のりといふ

け濤の名光太夫ハヤ一テロガラニといふ

濤入早く火矢を射しなれ濤の者たこれ
是船へ来りしと云は濤船の船子れり
なるや船建たる程懺の記歸をえりけ
安松の船よりてるもれく強り
妻船を射し案門しめて急なせしむ
使節並よ之役の人へ上陸せ



人家或拾七八軒も有るへ——本仰り而て海軍部
も何利

煽動者大同石火矢も湊の漁客墓に殺提
捕へあがり

湊の門は八百五十石積位の小舟計かり居るり
けりまゝマヨルといふ友より是様説する人五羽
カミシヤーツカと怪想人殺六百人計りも居ると
いふこれ中より新毒は

マヨル捕ま尾能動むれは五年も十年も居る
と説の者十人より居る——居る居るり是
怪ハ既設所と新毒をえ毒所へも居るといふ
非毒の時ハ何事も捕へあるり

七人の人をカミシヤータといふけり——地へも居る
ても居る居るり——五七人えりけたり髪
眼ともは黒——麻皮より製せる服と忌襟の布
より既へ着る居る居るり——これ七地を國に

の事なり

八月は雪のふりしきより凍り氷る由
農家の言はすホーツカと千里の官海氷り
雪車より氷を通ずといふけしき
すく大をほひ雪車より荷をほしき
せむるよりオホーツカのより使席ハ
けはうけをさるるよりきゆへを時節より
何れとも隙よりそはき致しきなり

奥路オホーツカの
船は深き

これより奥よりウエリホノ
と云といふよりきゆへハ
と云といふ船のみなり

カニシャーツカ又ニースノ
下もカニシャーツカ
より

といふありニースノ方ハ船程歩長き
人衆も多くカニシャーツカと海に帰る
の代りもといふ在籍といふ
使席けしきより奥よりハ土地の極みなり
事の多しや海に又たといふ海にきき

大矢等の破換せ——柄も等軍——て捨
あやうんといふ枝のうを吟味——且日本
交易の組のうあまをれハけ地より宅
送すへきや合の類なり英は席は組せ
奥帳事入帳不取の地とと表裏のあま
え届の為れりとせ

渾船中五五日めは代友もうへはあう使
席はあ合——又けあ右列は系組人とも

あると名をう飛脚を立——中

マヨルといふ友人けあよりあ人系組長崎へ
来れりミ——トルイロノイチといふ人とイワン
イワンマノイチといふ者とと長崎あ人けあ右
あすこれこ——スノカこ——ツカよりある中

按は右あ人の姓名おい——

又けあよりと隠せ——め——ハ画師某を人これハ
船中——より病来あ人けあは聲あを吟味——

医術も心得たる役人と隣りて其の病人
を救ふためとしてけ人の代りとして人
と入船場へむ

鉄炮指南人其人又之隣せむこれに
自分の役業を怠り万事を他法我ま
るりし處とすゆ

食料の事も二三日より事せざるを
入り又途中より泊る所の事よりしめ

あり本道へ送りしむる所あり

け湊より日本内地を二十一里ありといふを
拾ふめ八日ある事十八日の船を彼所へ送り

コレイツケといふしけ船は捕虜のふれる

ものを捕りしむるし
これワルツケといふハ
捕虜の船なり

事十九日の急よりくるし八日中人もあり
居る由の事なり

名の急よカニエヤ——ツカよりハおぼろき居る

故は船よりききしものなりと二日二日とも
海よりききしものなりと近きあるとそ

按て舟子光太史を源忌の海にけかこしヤ
ーツカとの船よりきりて地へ入る海路
をすホーツカよりお船して送り届け

られし由
海路記を按するはけ湊滞在八千餘

日と云ゆ

八月五日 カミコヤーツカお船

長崎阿葉院通船共和氣書と云ふ彼九月

十日我八月七日カミコヤーツカお船とあり

漂流人覚えある所の八月ありといへるハ

二日の遠し有り

それより日本長崎との渡海よりけしるが長崎

と三十日の元暦より お船も日私よりれハ三七

日よりけりといふと船中の記録人なり

日本海の沖ハ浪荒く世界は第一の難場なり
日本船ハ船の造りくく子緩き故に破船する
事多きハことなりなりと使節にへり
通船の如ハ地くくり五百里沖なりと終るえかけ
たる事一なり
携ひ来る繪巻を毎船中くく見合せ是
ちある年の事もありやとあるを毎度帳
のくくつけくくをえさせたり

出船して間もれくくハ蝦夷沖なりといひ是を
燈くけきくくけりハ仙臺也伝書のとくく
繪巻面書冊板を毎船中くく携ふくくあり
又くくくくもけり抜けくく日本のは城江の
船はあくく又燈くくけきくくけりハ燈セツ有
る船はハ丈といふ事あり傳書は通船くくく
といふわけ毎くく日本地の様子をせともくく初
一向地くく方角ハ知れぬるゆへ是は合点なりと

り事案ゆゑ一うもあつて是れは蔵物の
あるハハ丈をさす事ありぬるなりと
いひたり八月廿五日に是れ山をへりて彼所
薩摩也といふけしきありハ琉球あり今
居る所を琉球と薩摩の言はれぬやと
いふけしきはあらず船をさるる所一固よりあつ
と云へりれ我々の事知れといふおも油の
のりなりと嘲りたり同廿八日は薩摩乃

近く船をさるる所一固よりあつと云へり
いひ波浪あり荒く舟をさるる所一固よりあ
つと云へりれ我々の事知れといふおも油の
のりなりと嘲りたり同廿八日は薩摩乃

荷あももいふぬれ様ある程友船も解程
いふなり

八月廿五日の大嵐より一袖の硝子障子と彼
大浪より舟崩せしもの噂はけしきあり

國の舟ハ内へ碇の近きとあり沙のおどたるを
た大船より一遠きとけしきあり舟も漏れ
おどる船底へハありぬれ様ありあ

解れとも減まていふおめくもいふ解のゆゑ
南惑し〜てけき〜大ひよま留まり見まてえ
るも難き〜こめ〜やたり
中船うよあり居〜をえ解〜や向地のあ崎
う〜毎火を焼き〜あり使まこれとえて薩
摩地う〜かりとた〜るれお我〜こよとり
い皆〜い名ま〜長崎まで船の入るゆとあり居
る〜い〜

向ふよ高山え〜れお半月形りの数と〜きを
測りたり是におも温るる嶽なり

按よけ解ハオクタ〜スイスタラヒあといふ

測量等なる〜

薩戸の崎〜の門よタナゴと〜いふ所有何れの
う〜なりと使解〜るも我等あ〜あぬ地を
更よあ〜すとえ〜れお解は解るあま〜いむれき
者なり我堀内のもを〜すと〜て越〜ひたり

タナゴ臨ハ種々臨のりと少曲業ハ種子臨と

稱する中又あるを今ハた稱り臨といひます

一彼ハ田名を傳せざりと云ふ

羅針^{ホーリ}初ハ己午と云り振夷地の沖といひ一云

南へ云りそれより申西又酉戌まで云り一初めて

薩摩の心と云りけたりけ船中ハ一日又あなり

海と銘せしり

